



Laura PETERS,

*Dickens and Race*

(xii + 169 頁, Manchester University Press,

2013 年, 本体価格 £65.00)

ISBN: 9780719064265

(評) 田村真奈美

Manami TAMURA

本書は 1848 年から 1870 年までの人種 (race) についての考え方の変遷がディケンズにどのような影響を与え、またそれが、ディケンズが子どもの頃から抱いてきた異国的なものへの憧れ (と恐怖) とあいまって、いかに彼の人種観を形成したか、そしてその人種観が作品にどのように現れているか、を考察した大変意欲的な研究書である。

考察の対照となったディケンズ作品は、長編小説が『ドンビー父子』、『二都物語』、『互いの友』、『エドウィン・ドルードの謎』、その他に *Household Words* や *All the Year Round* のために書かれた多くのエッセイやクリスマス・ストーリーズなどで、取り上げられた作品の種類と数の多さに圧倒される。それらの中にはタイトルを見ても初めは人種との関連がピンと来ないものも含まれており、また評者が 19 世紀の人種観の形成についてまったく無知であることもあって、内容の予測がほとんどつかない状態で読み始めることとなった。

このように不案内な読者にとって大変有難かったのが、この研究書の構成である。ピーターズはあらかじめ序章で本書全体の構成を、各章 (本書は全 5 章から成る) の概要とともに示している。さらに各章においても、初めにその章の内容の要約があり、章末でもう一度議論がまとめられ、さらに次の章にどうつながるかまで述べられている (実のところ、同じことが各節においても繰り返される)。ディケンズ個人の人種観の変遷のみならず、それに影響を与えた当時の人種に関わるさまざまな研究や議論を追っていくのは骨が折れることであったが、節ごと、章ごとに内容を確認しながら読み進められるため、これには大変助かった。

ところで、序章冒頭でピーターズは、ディケンズの人種に関する「最も悪名高い (most infamous)」エッセイ ‘The Noble Savage’ (*Household Words*, 1853 年 6 月 11 日) に言及する。このエッセイ自体は第 3 章で論じられるが、その前にも何度も言及があり、その度に ‘most infamous’ という形容が繰り返されることもあっ

て印象に残り、途中まで本書の中心はこのエッセイについての議論なのだと思うていた。結局、‘The Noble Savage’はあくまで通過点で、ディケンズの人種観は最後まで固まることはなかったとわかるのだが、ディケンズ研究者にとっては「厄介な」このエッセイのタイトルを最初から出すことの効果は大きい。つまり、‘noble savage’という語義矛盾をはらんだ表現はディケンズの人種観を結果的には的確に表していたのであるし、また‘infamous’という語に惑わされ、ディケンズの人種差別発言に「弁解」が与えられるのだろうかと期待して読む読者もいるかもしれない(私がそうであったように)。「弁解」を期待すると肩すかしをくらうことになるのだが、ピーターズが主張しているように‘The Noble Savage’を通過点として進むと、その先にはディケンズの人種観の揺れと晩年の作品理解への新しい視点が見えてくる。ともあれ、あまり先走りせずに第1章から順に本書の内容を見てゆこう。

第1章の章題は‘1848: racial thinking, home and *Dombey and Son*’, つまり1848年が本書の論考の出発点となる年である。なぜ1848年なのか。まずピーターズは1848年がヨーロッパにとっては革命と反乱の年であったことを指摘し、ナショナリズムの台頭、あるいは階級間の衝突として捉えられることの多いこれらのできごとを、人種の問題として捉えたロバート・ノックス(Robert Knox)の考え方を紹介する。ノックスによれば、これらの反乱はみな、人々がnationとraceのどちらに帰属意識を持つかの問題に帰するというのである。また、ノックスは人種を生物学的に決定されるものと主張したが、この当時優勢だったのは人種を文化、文明と結びつけて考える態度であり、ディケンズの人種観も文明や階級と分ち難く結びついていた。しかしながら、19世紀を通じて人種に関わる言説に見られる特徴は、人種に対する文明論的アプローチと生物学的アプローチの緊張関係であり、その緊張関係の始まりがここに見られるのである。ディケンズも1848年には、『エグザミネー』誌にロバート・ハント(Robert Hunt)の*The Poetry of Science, or Studies of the Physical Phenomena of Nature*の書評を寄せるなど、科学の進歩に盛んに関心を寄せていた。そこでこの章では、1848年に完結した『ドンビー父子』の中に、まずは1848年以前のディケンズの人種観を見る。その結果、『ドンビー父子』は家族の問題を中心に据えた小説であるが、その家族の物語には帝国と人種の問題が絡んでおり、さらにそれはディケンズが子どもの頃から親しんだ空想の中の異国的なものと、執筆当時の人種に関わる諸言説へのディケンズの関心が交わったものとなっていると結論づけられる。

第2章も1848年と題され、引き続き『ドンビー父子』を取り上げているが、今度は1848年をディケンズのそれ以降の人種観の出発点とみなす。初めに、1848年にディケンズが書評を書いた*The Poetry of Science*は、科学の創造性と詩

的靈感への可能性を論じたものであり、ディケンズが科学に惹かれた理由が示唆されていると説明される。ディケンズの中では空想も科学も共に靈感の源であり、この二つが共存しているのである。一方、ディケンズがしばしば手がけた旅行記は国家と人種のプライドを表明する場としても機能した。『ドンビー父子』にも旅行記の要素があるが、そこはむしろ空想、異国的なものへの憧れ、科学など彼の当時の関心事が集約される場となっている。人種問題は、バグストック大佐の召使い(名前ではなく、常に‘the native’と言及される)の描写に最も顕著である。名前もなく、自らを語る声も持たない「原住民」からはほとんど人間性が感じられない。また、大佐に虐げられ続ける姿には帝国の階層的な構造が重なる。一方、ワーキング・クラスの登場人物(例えばスーザン・ニッパー)は、自分より社会階層が下の人種的他者を否定することで自己を規定しようとする。このように、舞台がほとんど英国内であるにもかかわらず、『ドンビー父子』には人種についてのレトリックと科学的な見解、類型的な植民地の人々などが頻出するが、それはまたヴィクトリア朝英国の日常生活を映し出しているという。

第3章では1850年代に入り、いよいよ‘The Noble Savage’ (1853) が取り上げられるが、その前に1840年代の終わりから1850年代初めに起きた人種についての考え方の転換が説明される。いわく、人種はもはや単に異国情緒をかき立てるものではなく、進歩という階層の中で捉えられるようになってきていた。また、それまで人種は常に文明と結びつけて考えられてきたが、次第に生物学的な観点に重きが置かれるようになった。さらに人種を考える上で、どの人種にも共通する人間性があるとする民族学的前提が、異なる人種は異なる種であるとする人類学的知見へと変わっていったのもこの時期だった。しかし、それまで優勢であった考え方が消えてしまったわけではなく、ディケンズも異国的なものへの憧れと科学的な人類観を使い分けていた。人種間の優劣の意識に満ちた‘The Noble Savage’の数か月前には、子どもの頃に親しんだ『アラビアン・ナイト』の影響が未だ感じられるエッセイも書いていた。ピーターズは‘The Noble Savage’を人種観の転換が起こりつつあった時代を象徴するものと考え、そしてこのエッセイが成立するまでを、1842年のアメリカ渡航での‘noble savage’との初めての出会いから、1849年に始まった解放奴隷をめぐるカーライルとミルの論争、当時人気を博していた異人種の見せ物や、ロンドンのイーストエンドで見た外国人を含む貧困層の実態などまで丁寧にたどり、それらがいかに‘The Noble Savage’における人種観を形成していったかを論じている。ディケンズは決して突然「野蛮人」に対する嫌悪を表明したわけではなく、また‘The Noble Savage’を書いた後も、空想の世界における異国的なものへの憧れを失ってはいなかった。‘The Noble Savage’の人種観は終着点ではなく、ディケンズがこれからも戻ってゆく

様々な考え方が一点に集結したものと考えるべきであり、同時にそれ以降の人種観がここから広がって行くともみなすべきだとピーターズは言う。つまり、このエッセイが他人種を貶めるものであることは否定できないが、時代のコンテキストの中で、またディケンズ自身の人種観の変遷の中でのこのエッセイの「位置」を見直した、ということなのである。

第4章は1857年のインド大反乱に対するディケンズの反応と『二都物語』を扱っているが、その前に、1850年代前半の*Household Words* 掲載のエッセイが取り上げられ、彼の想像力において異国的なものの占める重要性が未だ変わっていないことが確認される。一方で彼の人種観はますます科学に影響され、加えて植民地の原住民が帝国にとって脅威になりうると考えるようになると、人種に関しては空想の世界の影響は薄れていった。インド大反乱へのディケンズの反応としてはこれも「悪名高い」1857年10月4日付けのアンジェラ・バーデット＝カートツへの手紙と、ウィルキー・コリンズと共作したクリスマス物語の一編‘*The Perils of Certain English Prisoners*’ (1857) (舞台はインドではないが、インド大反乱が意識にあるのは明らか) が取り上げられる。現地の英国人を英雄視する一方で原住民を野蛮人とみなし、反乱には皆殺しで復讐を、という過激な態度は、実際には当時のメディアの態度と変わらないという。しかしながら、この章で面白かったのは、人種問題とは無関係に思われる『二都物語』の「人種的読み」であった。この小説でディケンズはフランスの貧民を擁護しており、反乱を起こしたインドの原住民への態度とは異なるように思われるのだが、実はフランス革命を描いたはずの作品で英雄となるのは英国人であり、フランスの農民の多くは「野蛮人 (savage)」として表象される。また、インド大反乱では自ら武器を取って戦ったインド総督の娘が英雄視されたが、『二都物語』で戦う女性たちは血に飢えた恐ろしい存在とされ、特にマダム・ドファルジュは単なる *savage* にとどまらず *cannibal* とさえ呼べるかもしれない。ここではフランスの白人社会において、貧困という環境によって貧民たちが人種的に「退化」したことが示唆されている。そして、それはディケンズがロンドンの貧困層の中にも見出していたものだった。

最終章である第5章は、1860年代に入り、進化論と自然選択の概念によって大きく変化した人種観と、ディケンズの想像力の危機の問題、そして『互いの友』と『エドウィン・ドルードの謎』が取り上げられる。ここでも初めにエッセイ——*Dullborough Town*’ (1860) と ‘*Mr Barlow*’ (1869)—— が取り上げられ、その中でディケンズが、子どもの頃の空想の世界が論理的な知識へと置き換えられ、そこへ戻ることが難しくなっていると述懐していることが指摘される。そのような中で書かれた『互いの友』では、ディケンズは人種の違いを概念化するにあ

たって、空想の中の異国的なものや子どもの頃に読んだ物語の力を取り戻そうとしている、とピーターズは主張する。ジェニー・レン、ライア、スロッピーといったマージナルな人物たちが、おとぎ話の中の異国情緒を語りの中に持ち込んでいるというのである。一方で、繁栄するロンドンのただ中で未開状態のような暮らしを送るガファー・ヘクサムのような存在もいて、息子のチャーリーは‘un-completed savagery and uncompleted civilisation’ と描写されている。1860年代の進化の概念は、退化の概念と分ち難く結びついており、彼らが象徴しているのは退化してゆく文明なのである。さらに『互いの友』では自然選択の論理も働いているとされるが、ただしこの小説で生き残るのは最も環境に適応した者ではなく、善良な者であり、道徳的にも退化した「野蛮人」は「未開の沼」に消えてゆくしかない。

『互いの友』にも描かれていた英国(特にロンドン)の *cosmopolitanism* は、『エドウィン・ドルードの謎』では国家とその基盤としての家族を脅かすものとなる。その象徴がランドレス兄妹で、彼らは植民地にも英国にも家がない。2人はクロイスタラムの文化的他者で、うまくコミュニティに同化できない。このように、植民地から流入した異人種のみならず、植民地帰りの英国人すらも土地に根ざしたコミュニティを脅かす可能性があるとしてディケンズは考えた。また、2人が英国社会に同化できないのは彼らが激しい感情をうまくコントロールできないためでもあるが、その性質は東洋と結びつけられている。東洋はジャスパーの吸うアヘンとも結びついており、この小説では悪徳を東洋と結びつけることで、良き英国社会を再構築しようとする姿勢が感じられるという。しかしながら、このような独我的ナショナリズムは、翻って国と文化の活力を奪うことにもディケンズは気づいていた。結局『エドウィン・ドルードの謎』では、帝国主義的拡大の結果、却って英国の文化の活力が失われてゆく様が描かれていると結論づけられる。

以上ざっと内容を見てきたが、169頁という頁数の割に内容が盛りだくさんであると感じられるかもしれない。本書は「人種」という切り口からディケンズの想像力の変質までも論じ、さらに晩年の作品の新たな読みの可能性まで示していた。正直なところ『ディケンズと人種』というタイトルからここまでの広がりには期待していなかった。これを機に、取り上げられていた作品を読み直してみたいと思うような、刺激に満ちた論考であった。